（別紙２）

審査の結果の要旨

氏　名　　姜　英　淑

本論文は、韓国語の慶尚南道の諸方言のアクセントを記述し、それらの体系を明らかにしたものである。慶尚南道の諸方言は、弁別的なピッチ・アクセントを持つことと、韓国語の他の地域の方言と比較して、そのアクセント体系が複雑であることが知られていた。その複雑な体系を音韻論的にどう捉えるべきかについては、多くの先行研究にもかかわらず、いまだに充分には解明されていない状態にあった。本論文は、慶尚南道の諸方言のうち 11 の方言を選んで詳細に調査し記述するとともに、アクセント体系の理論的枠組みを再考することによってその本質に迫ろうとしたものである。また、慶尚南道内部において、東部にはアクセント的な方言、西部には語声調的な方言があり、東から西に漸進的に体系が移行するが、本論文はその全体を扱うことによって、それらの体系相互の関係を示唆するとともに、アクセントと語声調に関する類型論にとって興味深い実例を提供している。

この地域のさまざまなアクセント体系を把握するために本論文で理論的に新しく打ち出された点は、1）慶尚南道諸方言には（狭義の）「アクセント」と「語声調」という2種類の特徴が存在し、それが１つの体系に離接的に共存すること、2）語声調にも位置による弁別性があること、である。このうち、アクセントと語声調の関係については、先行研究の中には、１つの体系の中にそれらが離接的に共存することはないとする見解があったが、その理論的根拠は明白ではなかったのに対して、本研究では、両者の共存を認めることによって、アクセント体系の音韻論的解釈と複合語アクセント規則の理解が容易になることを、説得力をもって示している。また、語声調に位置の対立を認めることは、語声調の中にもアクセント的なものと声調的なものを認めるということになる。この点については、はたしてそれが語声調と分類されるべきものかについて考慮の余地がありうるが、本論文では、それらとアクセントとのふるまいの違いがさまざまな局面で首尾一貫して現れることを示しており、説得力のある議論を展開している。また、いくつかの方言について、表層体系と基底体系が異なることを精緻に論じている点も興味深い。総じて、本論文で提出されたアクセント体系の解釈は、従来の研究よりも一歩進んだものであり、また新たに提出された理論的な枠組みは、韓国語に限らず、多くの言語について、アクセントや声調の解明を進める上で有益なものと認めることができる。

本論文の課題としては、慶尚南道の諸方言におけるアクセント体系相互の間の歴史的関係にあまりふれていないことがあげられるが、上に述べたようにこの論文の学術上の意義は、アクセント体系の共時的な解釈を前進させた点にあるのであって、この点において本論文は充分な価値を持っていると言える。以上の理由により、審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものとの結論に達した。